

持続可能な地域づくりとレジデント型研究者

総合地球環境学研究所 研究部 准教授 菊地直樹

1 持続可能な地域づくりに向けた研究

環境問題が深刻化するなか、多くの人が協働しながら持続可能な地域づくりに取り組むことについては、一般論としては賛成であっても、具体論になると、意見はなかなか一致しません。人も環境も多様であるし、地域における人と自然のかかわりもまた多様であるからです。

私が現在所属している総合地球環境学研究所の「地域環境知」プロジェクトでは、多様な人びとによる協働を通じて、地域の環境にかかわる知識(地域環境知)がどのように生み出され、持続可能な地域づくりにどのような役割を果たしているかを明らかにするための研究を行っています。それぞれの地域に何があり、どんな問題があって、何ができるのか。地域の環境にかかわる知識に注目して、持続可能な地域づくりを考えていこうとしています。

2 レジデント型研究者に注目

知識と言われても抽象的でピンとこないかもしれません。そこでプロジェクトでは、居住している地域が抱えている問題の解決に向けた知識を生み出している人たちに注目しています。普段は別の地域に住んでいてフィールドに通う訪問型の研究者と区別するために、こうした人たちのことを「レジデント型研究者」と呼んでいます。レジデント型研究者は、大学の先生といった職業的な研究者だけに限りません。博物館や資料館の学芸員、学校の先生、行政の職員、NPO活動家、農協や漁協の職員など多様です。こうした人たちは、地

域住民と研究という両方の視点から地域の課題を考えることができます。改めて探してみると、さまざまな地域で色々な立場で活動しているレジデント型研究者がいることに気づきました。

3 レジデント型研究者としての私

私は総合地球環境学研究所で仕事をすることで、13年間にわたって兵庫県豊岡市に暮らし、絶滅したコウノトリを人工繁殖し野生に戻す取り組みに参加していました。人里に暮らすコウノトリが生息できるためには、生き物が豊かな環境が不可欠です。そうした環境は人間が手を加えることによって創られ、維持されます。したがって、コウノトリを野生に戻すことは、人と自然とのかかわりを創り直すことに他なりません。コウノトリの野生復帰という取り組みのなかで、私は環境社会学の研究者であるとともに、当事者でもあり、地域住民でもありました。私はコウノトリと暮らすという視点から研究を行うレジデント型研究者として活動してきたのです。

4 まずは「聞く」こと

その後、私は豊岡市から離れレジデント型から訪問型の研究者となってしまいましたが、この経験を活かし、北は北海道、南は石垣島まで各地で活動しているレジデント型研究者への聞き取り調査に取り組んでいます。聞き取り調査は、「聞く」という単純な方法と思われがちですが、幾つか利点があります。柔軟に聞く耳を持っていれば、その人なりの

考え方を総合的に知ることができることで、話を聞くなかから、何が問題なのかを発見することにもつながります。

もちろん、何の準備もなしで始めるわけにはいきません。プロジェクトでは、聞く項目をまとめた「自己評価シート」を作成し、それに従ってレジデント型研究者がどのような知識を生み出し、地域の中でどのような役割を果たし、何を課題として抱えているかを聞くことにしています。自己評価シートと名づけた理由は、最後に触れたいと思います。

5 地域内の関係の大事さ

聞き取り調査をして分かってきたことは、レジデント型研究者は地域の環境を持続的に利用するための動機付けの形成や選択肢の増加、地域内での協働につながる知識を創りだそうとしていることです。地域内の顔の見える人たちを意識して活動しているといえそうです。考えてみれば、そこに住んでいるのだから、地域内の関係を重視するのは当たり前かもしれません。これは私の経験と一致します。

かといって、地域外の人たちとの関係やグローバルな課題への関心が弱いわけではありません。世界自然遺産登録に向けた活動が活発になりつつある鹿児島県奄美大島を訪れた時のこと。集落(シマ)の中を歩き、お年寄りの話を聞き、それらをまとめて地域みんなが共有できるようにする集落遺産活動が行われています。この活動の中心人物である地元の博物館館長は、「集落遺産で学んでグローバルへ持っていく。それが世界遺産になった、でいい」と話しました。地域の価値を共有することから始めて、より広い世界の人たちとつながっていかうとしているのです。地域外からの知識や情報があって、初めて地域のよさ

に気づくことはあるでしょう。少子高齢化が進む地域ではよそ者の力は不可欠です。そうした状況のなか、レジデント型研究者たちは外からの知識をそのまま地域に持ちこむのではなく、地域内の色々な人たちが理解でき共有できるように変える活動をしているのです。

レジデント型研究者たちは、持続可能な地域づくりの取り組みにおいて、地域内の協働を促進する、地域内と地域外をつなぐ知識を創るという大事な役割を担っていることが分かってきました。

6 自己評価ツールとしての聞き取り調査

調査は基本的にデータを収集するために行うものです。この聞き取り調査は、レジデント型研究者がどのような知識を生み出し、地域の中でどのような役割を果たし、何を課題として抱えているかを調べることを目的としています。ただし、もう一つの目的も持っています。私たちが聞くことをきっかけに、レジデント型研究者が自身の活動への評価につながることも目指しているのです。聞くという行為は、語るという行為と対になっています。聞くことによって語る。語ることによって振り返る。こういう相互の関係のなかで、レジデント型研究者の自己評価ツールとしての聞き取り調査という側面も持つように努力しているのです。

実際、聞き取り調査が終わって、疲れた表情で「でも、自分の活動を振り返るいい機会になりました」と言ってくれる方もいます。自分のことを自分で評価することは、思いのほか困難です。聞き取り調査が、語る人にとって自己評価につながる。そのような聞き取り調査の持つ、そうした可能性も探求していきたいと思っています。

(きくち なおき)